

## 大友宗麟の墳墓に関する研究

増村隆也

## 一、はしがき

大友宗麟の墓と称するものが津久見市にある事は周知の事であるが、この津久見の宗麟の墓は徳川時代の中期に造られたものである点から考えて、眞の宗麟の墓は必ず他にあるとして史家は等しく注目していた。筆者はこの宗麟の墓に就いて一応の考察を廻らして見たいと思う。

豊後国志に「大友義鎮墓在穂門郷津久見村松林中、墓碑曰天正十五年五月」と記し、大友系譜には「天正十五年五月二十三日五十八才薨、海部郡中村森江葬ル」と記し、更に大友系図には「天正十五亥五月二十三日臼杵城逝去、五十八才」と記している。然し豊後国志に記してある旧津久見村の松林の中ではなく杉林の中であり、大友系譜の海部郡中村森江と云うのも疑わしく、大友系図に記してある臼杵城にて逝去と云うのも誤である事は史家の認める所である。

## 二、津久見の大友宗麟の墓に就いて

大友宗麟の墓と称するものは津久見市中田区の引地にある。墓碑の正面には瑞峰院殿前羽林次将兼左金吾休庵宗麟大居士と刻まれ、右側には天正十五丁亥年五月二十三日春秋五十有八才とあり、左側には九州二島兼伊予管領従四位下兼左近衛少将大友左衛門督源義鎮と刻まれているが、この墓碑は大友史料によると寛政年間臼杵の旧族臼杵城豊が宗麟の墓所の荒廃するに任され墓碑のない事を嘆き、自ら資を投じて津久見村彦の内字「ミウチ」に改葬し墓碑を新調した事を記している。

宗麟の死したのは天正十五年五月であるから、臼杵城豊が墓碑を新調したのは宗麟の死後二百年以上後になる訳である。その二百年以上後になつて建てられた墓が現在の墓である事は間違ないが、宗麟の死の直後建てられた墓はどうであつたか。

大友史料には、天正十五年五月五十八才で宗麟が津久見の別荘で病死すると、天主教の儀礼を以て赤河内の岡に葬り、碑石も天主教の式によつて造られたが、宗麟の長子義統は一杯の土未だ乾かざる時、仏教徒をして之を改めさせ、前に造つた天主教式の墓をこわし仏式の石碑を建てた事を明記している。

義統が仏式の墓に改めたのは何故であるか、何時頃の事か、更にその墓はどうなつたのであるか、そこに問題が残つて来る訳である。筆者の論ぜんとするのはその問題であると云つてよい。

宗麟の死した天正十五年（一五八七）に豊臣秀吉は切支丹禁教令を發している。仏式の墓に改めたのはこの為であると云つてよい。

大友義統が朝鮮の役の罪を問われ、秀吉から領地三十七万石を取りあげられ山口の毛利輝元に預けられたのは、文祿二年（一五九三）五月であるから、宗麟の死後僅かに満五年しか経っていない。その五年の間に義統が仏式の墓に改めたと考えねばならないが、更に一步を進めて天正十七年に大分郡高田村の切支丹シヨラム仲摩（七〇）と云う老武士が府内（大分）で捕えられ、義統に殺されている事実から考えると、義統の改葬したのは天正十五年から十七年の間と考える外はなく、大友史料記載の如く誠に一杯の土未だ乾かざる時であつたと考えねばならない。

義統の建てた仏式の墓は現在のものでない事は改めて云う迄もない。豊後キリシタン年表（福田紫城氏）大分県郷土史年表（半田康夫氏）によると慶長十八年（一六一三）ヨセフ師が津久見の宗麟の墓地に天主堂を建立した事を記している。現在、宗麟の墓の近くで一段と高い所に天徳寺跡と云う所がある。或はこの天徳寺跡がヨセフ師の建てた天主堂の跡ではあるまいかと想像される。然してこの天徳寺と云う寺が佐伯市の郊外にある。

### 三 天 徳 寺

佐伯市の池船橋を渡り更に進んで堅田トンネルを出ると右手の岡に下城遺跡がある。その山ついで一段高い山を背にした密林の中に天徳寺と云う大きな禅寺がある。この天徳寺は昔、津久見から移されたキリシタン寺であると云われている。天徳

寺の天は天主教の天と関係があるのであろう。この寺には昔から面白い奇習がある。それはこの寺で法要を営むとか何か行事を行うと、大分県南海部郡上入津村字尾浦にある檀家二十五戸から必ず寺に魚を届けることが現在まで続けられている事である。これはキリシタン寺であつた時の習慣が今に残っているのであろう。

天徳寺の本堂の右横に薬師堂があり、その薬師堂の裏に歴代の和尚の墓が桧の林の中に二列にならんでいる。そのつき当りの正面に大友宗麟の墓と云い伝えられる墓がある。

#### 四 天徳寺の大友宗麟の墓

この墓は一風変つた墓である。墓の台は幾つかの安山岩で石垣を作るように造られ、幅約百二十三纏四方、高さ約四十纏の台がある。その上に斗栱形の石が置かれている。この斗栱形の石は正確に云うと高さ三十五纏、幅三十九纏四方のもので安山岩であり、その上に形の如く円筒状の墓碑が立っている。

問題はこの斗栱形の石である。斗栱形の石の前面に何か刻んであり、上に乗っている円筒状の墓碑を動かして見るとそこにも何か刻んであり、後面にも何物か刻んである。その刻んであるものを誰も読み得る者はなかつた。或る者はそれをポルトガル文字だと云い、或る者はキリシタン墓独自の記号だと云つた。その斗栱石の上に乗っている円筒状の墓碑には唯寂靜の字が刻まれているだけである。この円筒状の墓碑も普通に見られる僧侶の円筒状の墓の如きものとは一寸越きを異にしている。

筆者はこの斗栱形の石に彫つてある所謂ポルトガル文字とか云う其の文字を読む事にとめた。拓本にとつて研究して見ると、これは仏教で卒都婆（そとば）等に使う梵字に似てゐるではないか、更に追求して見ると梵字に間違いない事が判つて来た。其は風雨の侵蝕も甚しいものであるが、前面の字は梵字のキルクと読む字であり、上面はアーク、後面はウンの梵字である事が判つた。唯今まで其が読めなかつたのは三方に梵字を刻み、それを右方に横倒しに置いてあつたからである。然して左右の両面（その石を立てた場合には上下の面となる面）は比較的滑らかに加工してあるが何も刻まれていない。筆者は右に横

倒しにしたのは後世の事で、必ず下面（立てた場合は背面となる面）にも何か刻んであるものと考へ、その地面に接する面を檢べて見たがそこにはノミの跡も荒く何も彫つていない事が判つた。結局この斗櫛形の石は三方に梵字を彫り、上部を右にし横倒しにすべく作られたものである事が判つて来た。そこに問題がある訳である。

## 五 天徳寺に伝わる口碑

天徳寺の現任職の語る所を聞けば益々宗麟の墓を思わしめるものがある。大友が豊後國から除かれると豊後國に残つた大友の家臣は津久見に殺された宗麟の墓が氣にかゝつた。戦にあけくれする戦国時代である、いつ墓をあばかれるとも判らない。平家は源氏に追われて京都を落ちる時、重盛の墓のあばかれる事を恐れて重盛の遺骨を奉じて都を落ちた。宗麟の家来も津久見にその儘置いておくのに忍びなかつたのである。宗麟の近侍山田某・小野某と寺社奉行であつた津崎某等七人の者は、相謀つて宗麟の墓石と宗麟が生前愛蔵した仏像一休を潜かに暗夜に乗じて何れにか持ち去つた。彼等七人が落ちて行つた先は佐伯市長谷の現在の天徳寺のある台地であつた。柵牟礼の城下から一里半以上離れ、人家にも遠い山の中の密林におほわれた台地である。津崎等はそこを適格の地として選び宗麟の墓石を安置し、仏像は庵を建て、祀り、そこで所謂落人の生活を初め宗麟の墓を守つた。それは宗麟の家臣等の旧主に対する忠義の現われであつた。然し佐伯氏に代つて佐伯の領主となつた毛利高政は鶴屋城を築いた。新城から一里もない所に大友の浪人が集團生活をしている事を高政はゆるさなかつた。高政は大友の浪人等にこの台地からの退去を命じ、津崎等を中浦村鮎浦に移し、山田、小野の兄弟等を上入津村尾浦に移住せしめた。現在津崎の後裔は上記の上入津村尾浦に住みて廿五軒を数えている。この廿五軒は現在尙、天徳寺の檀家であり前述の通り、天徳寺に何かの行事がある度毎に必ず魚を寺に届ける奇習が残つている。尾浦と鮎浦、天徳寺と尾浦、鮎浦では地理的に見ても大きな山々を距てた土地である。高政が地理的に不便な土地を選んで天徳寺から遠い所にこれ等浪人を移住せしめた原因が奈辺に存するかは自ら肯けるものがある。和尙の話を聞いた筆者は佐伯市西谷の津崎に問い合せた。津崎氏の談話の内容は天徳寺の老

僧の話を裏書するものであつたが、残念な事には家に伝る古文書は明治になつてからの火災に全部焼いて了つた由であつた。写してもあればと思つたがそれもなかつた。残念に思われた。

## 六 堪慶作の薬師如来像

津崎、山田、小野等が墓石と共に津久見から佐伯に奉じて来た仏像は、宗麟が上洛の節宮中に参内して天皇に拝謁した時、天皇は宗麟が切支丹であることを諜めて改宗をすゝめ、宗麟の守本尊として下賜された堪慶作の薬師如来であつたと云う。この薬師如来像については色々の靈驗があつた。伝え聞いた毛利高政の家老戸倉某は姫の病氣平癒を頼んで来た。然し時の和尙は大夫の浪人を遠地に追放した事を理由に祈禱を断つた。高政はこれを聞いて大いに怒り、和尙を國外に追放し、その堂を焼き、薬師如来の仏像は没収して毛利氏の菩提寺である養賢寺に收めてしまつたが、明治になつて養賢寺から天徳寺に歸され、現在の天徳寺の薬師堂に祀つているのだと老僧は話した。果して堪慶作のものか否か筆者は未だ拝観の榮を得ていない。

## 七 果して天徳寺の墓は眞の宗麟の墓であるか

天徳寺では上述の斗椀石の墓を宗麟の墓と云つていると同時に、これを開山墓と云つてゐる。では宗麟と開山とは同一人であると考えねばならない。

寺には開山の肖像画が伝つてゐる。それは蝕れて再表装したものであるが、これが世に伝えられる宗麟の肖像画にそつくりなのだから問題は更に面白くなつてくる。

豊後困志を見ると天徳寺の開山は一伯亭禪師となつており、天正年間草庵が中興したとなつてゐる。勿論こゝに云う肖像画の開山は中興開山の意味と思われる。その中興開山草庵が宗麟と同じ年の天正十五年に死亡してゐる。之等から考えると宗麟の墓を開山と呼んでいる訳が自然と判つてくる。

津崎等は宗麟の墓を密かに運んで今の天徳寺の台地に祀り、あばかれる事を恐れた。勿論宗麟の墓と云う訳には行かない。

何とか別の名前にせねばならない境地にあつたと考えられる。宗麟は宗滴とも云い、休庵とも云つた。この宗麟、宗滴の宗と、休庵の庵をとれば宗庵となる。宗庵では尙宗麟の墓と想像される恐れがある。そこで宗庵に発音の似ている章庵とし、開山章庵の墓としてカムフラージュし、この墓のあばかれる事をさけるべく策したのではなかつたか。結局津崎等の計畫通りこの墓は宗麟の墓だと云われながら、同時に開山の墓と云われていた為に現在まであばかれずにすんだ訳である。

現在津久見にある墓は、明治になつて何者かに墓の傍から横穴を堀り、墓をあばかれた事実がある。然し金銀財宝どころか瓦の破片も出て来なかつたと云う。

天徳寺のこの仏式でもなく切支丹の形式でもないこの墓石に就て考察するに、義統が仏式のものに墓を改めた時、宗麟が切支丹であつたことから切支丹独特の墓石とも云うべき斗榭形の墓の形式を捨てかねて、斗榭形の石を作り、それに梵字を彫つて仏教式のものを加味したのではなかつたか。更に仏式の梵字をほりながら、尙その頭部を右に倒して置くように造つたと云う事も、天主教の形式を重んじた為ではなかつたか。然し仏教式まがいの墓石だけでは尙安心出来なかつたものと思われ、この斗榭石の上に見僧侶の墓と見せかけるべく、円筒状の石を置き、更に之を開山墓と呼ばせたのではなかつたかと考えられる。

この墓が宗麟の墓であると云う事を裏書するものに次の事実があつた。それは大正年間、時の大分県知事がサクメイ使として衣冠束帯に身を正し、津久見の大友宗麟の墓に差遣された事がある。聞、所では仲々大々的な行事があつた由である、勿論大きく新聞に報導された。それを見た杵築家に住む大友の旧臣の後裔と云う津崎某は、態々佐伯に行つて天徳寺を訪れた。その津崎某は家に伝る古い記録を見て、天徳寺こそ宗麟の骨を埋め、真の墓のある所である、和尙はそれを知つていたのであるか。知つていて尙それを公にせず、黙つているとは誠に怪しからぬ坊主である。公にしさえすれば今度のサクメイ使は当然天徳寺に御差遣されるべきものをとねじ込んで来た。和尙は唯微力にして其を公に出来ず、津久見の大々的な行事を傍観していたのは汗顔の至りであるが、何れ当寺に宗麟公の真の墓所があり、当寺こそ宗麟公の御菩提所である事が公に知られて来る時

もありませうからと、平謝りに謝つたと和尚は昔物語りに物語つた。杵築の津崎某の家に伝ると云う古記録を見れば、宗麟の墓である事が更に明らかになつて来る訳である。それは大分大学又は杵築方面の史家の研究に俟つことにしたい。菩提寺云々の問題に就ては慶長十八年（一六一三）ヨセフ師が津久見の宗麟の墓地に天主堂を建てた、その吉支丹寺天徳寺が佐伯の長谷に移つた事から考えて、天徳寺こそ菩提寺である事は明らかで、今更論ずる迄もなかるう。二九、七、二三、稿

（医学博士 津久見市下青江）

## 郷土史話

## 大野直入兩郡

## 良兵を出す

武士の発生は、牧や騎獵と関係がある。東国地方に早く武士團が発生したのも、そうした面から理解される。令制では軍團の馬匹は、國毎の牧から補給される規定である。たゞし豊後の牧

らは当然置かれた事が考えられるし（に於て要と為す」と述べ、兩郡の男子西岡氏莊園史の研究）、然らずとも私が騎獵にすぐれ、兵士として不可欠で牧が存したのであるう。大野・直入の原野は最も適地で、牧口等の地名からも推定される。天長三年（八二六）政府は辺要の軍團が、農民の生活困窮のため養額に瀕したので、この制を廢して選士の制に改めた。その官符に「豊後國大野直入兩郡は騎獵之見を出す、兵

ある事を強調している。平安末期に、いち早く大野泰基や緒方惟榮・阿南惟家等の在地武士が出て、源平合戦等に活躍するのも、こうした地域の背景を考える事によつて、はじめて合理的に理解される。（渡辺澄夫）